

七・八月と言うと

お盆の季節・

昔、日蓮尊者が餓鬼道に落ちて苦しんでいる母を救おうと、お釈迦さまに相談されたところ、百味の食を修行者



達に供養しなさいと教えられた故事が、うら盆会のもとと言われていますが、日本人の祖霊信仰のあらわれというより、今ではすっかり私達の生活の中に溶け込んだ文化だと感じています。

△ △ △

檀信徒の皆様方にはお変わりなく、お元気のことで存じます。

団塊の世代といわれる人々が、後期高齢者となり有病率も上昇し、日常生活上の困難が急増してのことでしょうが、この所施設に入所なさったという人がめだつて、

す。

フランスの医師で占星術師のノストラダムスの驚世的な予言詩が、一時、巷間を騒がせたように、東日本大震災が起ることや熊本地震の日時などを以前から注意喚起していた、未来からやってきたという人がツイッターで、今の私達に将来にわたり、起きた出来ごとを語ったものが流布しました。その未来人が種々の情報を発信していた中でも、今年の七月に、今までの災害がくつがえされる程の大震災が起き、日本の半分は倒壊するといった話は、未来人なんて眉唾物だと、その存在を疑問視していた人も、東日本大震災の映像をオーバーラップして、確信性のないこととはいえ、不安だけが増幅したようです。

このような漠然とした不安だけでなく、身近なところで、年金生活が破綻しないだろうか、衰えていく身体を維持する方法は

ふえてきたように思えます。お寺参りに来られるたびに、にこやかにほほえんでおられたお顔や、元気に近況を語っておられたお声の主が、少しずつ減っていき、淋しく思うこの頃です。新しい環境の中にあつても、一日一日を心楽しく笑顔で日送りをしてほしいと願わずにはおられません。

苦しみ、悩みからの脱却

―安心の世界―

近年頻発する自然災害、地球環境の変動に加え、国際紛争や内戦にも終わりが見え、そして差別、格差、いじめ、凶悪事件などの社会問題・・・と、私達は多くの課題や問題に直面しています。

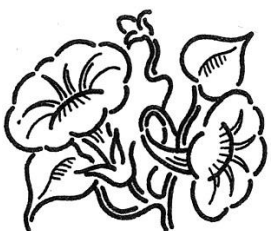
テレビや新聞をみても、心あたたまる記事やホツとする出来事は何一ツなく、傷ましいニュースに不安や迷いが増すばかりで

ないのか、そして愛する子や孫が安穏な生活を将来にわたり、送れるだろうかなど、いろいろな観点で心配の種は尽きず、誰もが不安で、心が締め付けられるような思いをする時があるものです。

果たして本当に起きるのか・・・その時になつてみないとわからないこと・・・いくら考えても、現時点では結論のでないことでも、全て本人にとつては一笑に付することのできない重大事で、迷い、暗闇の中で私達は苦しみ悩むことがあります。

インドから中国へ禅の教えを伝えた、菩提達磨^{だるま}大師と後に弟子となる慧可との間に、次のような問答が伝えられています。

慧可「生きていく自信をなくし、心が不安でたまりません。どうか、不安な心を取り除いて下さい」



達磨大師「よしよし、その不安な心をここにもつて来なさい、私がその心を安らかにしてあげましょう。」

慧可「不安な心を一生懸命探しましたがどこにも見つかりません。」

達磨大師「そうか、そうか。あなたの不安は既に取り除くことが出来ました。これで安心できたでしょう。」

『無門関』第四十一則「達磨安心」

達磨大師は、元々、形のない「心」に自分が不安という闇を作り出しているのだと諭され、そのことに早く気づき安心の世界に生きることを教示されました。

又私の尊敬する大雄山の元山主、余語老師は「心配しないで、世界の苦悩を一身に背負うなんてことは、人間にはできやせん。」と話しておられます。

○迷いては この身につかわれ
悟りては この身をつかう

○満員バスに乗っていると
一人も乗ってくれるなと思う
待っていたバスが満員だと
一人ぐらいは乗れるのと思う
立場によつて 人の心は変わる

特別志納者の紹介

○為 康寧顕心法尼菩提供養
金 五万円

一寸木 昭司殿
特別のお志をいただきました。
ありがとうございます。

投稿

お盆によせて
昨夏はナスをいただく機会が多く、食卓

一步一步、自分の歩みだと感じながら、
ゆつたりと人生を歩く。

それが楽しい状況でも、苦境にあつても或いは平々凡々たる時間の流れの中でも、変わらず、そうできたら、これ以上の安心はないと思います。

一口伝導板

○よそめにも

とうとかりけり み仏の
みすがた拝む 人の姿は

○今月もうれしやすこやかに

仕事なし得し喜びを

親子ともども打ちつどい
分かちて夕餉 たのしまん

○安らかに 港に船の浮かべるは

沈むいかりの 力なりけり

に「焼ナス」が並ぶ日が何度もありました。
「熱い、熱い」と一人言をいいながら、指先を水につけては、焼いたナスの皮をむいていたのですが、ある日、皮と身の間に、つま楊枝を差し込んで皮をむけばいいことに気づきました。そして同時に、亡き母もこうしてつま楊枝を使って焼きナスの皮をむいていたことを思い出しました。

余り家事手伝いをする娘ではなかったの
で、結婚してからの生活は、全て一からの
勉強の日々でした。そんな私も、食事の支
度をしている母の姿をじつとみている、幼
い日があつたのでしょうか。ナスのむき方と
いう小さなでき事で、久方ぶりに母と出会
えました。

亡き人の在すがごとき 魂まつり

魂棚の奥なつかしや 親の顔

(安藤 百合子)
